

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本地学教育学会

(代表者 川村 教一 会員数 約 500 名)

FAX 03-5227-8631

日本地学教育学会では、令和8年度大学入試共通テストにおける問題の出題方法・内容・難易度等を、大学及び高等学校地学担当教員等の意見・評価をもとに検討を行った。本検討は、本学会会長の下で8人の会員が委員となり、東京都理化教育研究会地学専門委員会（幹事：可長清美）、埼玉県高等学校理化研究会地学研究委員会（幹事：富樫民樹）、神奈川県高等学校教科研究会理科部会（部会長：千葉美希子）、茨城県高等学校教育研究会地学部（部長：渡邊聡）などにおける研究協議や関係メーリングリスト等を通じて地学教育関係者の意見を広く集めたものである。

「地学基礎」

1 前文

一昨年まで登場していたベン図やマインドマップ（コンセプトマップ）などの新課程を意識した出題はほとんどみられなかった。一方で本試験、追・再試験共に共通することとして、新課程以前や共通テスト以前のとてもオーソドックスな問題が多く出題された。また、図表を基に思考力・判断力・表現力等を問う問題が増加し、昨年度よりも難易度は高まったと思われる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

大問数は4、問題数は15、ページ数は19であり、対話形式の問題が本試験と同様に2題設定されている。出題分野に偏りはなく、全分野からバランス良く出題されている。図表問題は11問、計算問題は3題、組合せ問題は13題であった。計算を含む思考力・判断力・表現力等を要する問題が多く、単純な知識の理解を問う問題は少ない。しかし、基本的な内容を活用することで解答可能となるよう工夫されている点は評価できる。思考を促す場面設定や、趣向を凝らした問題も多く見られた。また、6択・8択の問題が4題出題されており、全体の難易度を押し上げている。なお、本試験でも見られた出題方法として、発展的な内容や4単位「地学」の内容をリード文で説明・明記したうえで解答させる問題が幾つか見られた。このような出題形式の妥当性については、今後、議論及び検討が必要である。問題の難易度については、委員間で意見が分かれている。地学に関連したニュースに日頃から触れている受験者や、観察・実験を多く経験してきた受験者、資料を通して学習してきた受験者に配慮した作問は、今後も継続していただきたい。また、思考力・判断力・表現力等を問う問題の増加は歓迎されるが、増加傾向にある「地学基礎」受験者数の減少を招かないような出題方法が、今後も期待される。

第1問 活動する地球・移り変わる地球に関する設問である。Aは惑星の概観と地学変動に関する出題である。Bは火山とマントルに関する出題である。Cは生物進化に関する出題である。

問1 地球の概観に関する基本的な問題である。地球楕円体の証拠として扱われる「緯度差 1° あたりの経線弧の長さの違い」を、偏平率の値から判断させる形式で出題した点は評価できる。また、この内容を他の惑星に置き換えて考えさせた点も良い。密度についても内容は基礎的であるが、表の数値を用いて計算する必要があるため、難易度はやや高い。水星の密度が「地球

に次いで大きい」という知識でも解答可能であるが、出題の意図は、質量と体積の違いを比較させ、判断させる点にあると思われる。また、密度の計算においても、地球を1とする設定にし、惑星半径ではなく体積の数値を示すなど、受験者が計算しやすいよう工夫がなされている。

問2 地震に関する問題である。グラフから変位量及び地震周期を求めさせる基礎的な良問である。グラフから直接変位量を読み取ることができるため、解答に到達しやすい。リード文とグラフの情報を正確に読み取る力が求められる。また、縦軸が地震発生時を0 mとして示されており、数値が読み取りやすい点にも工夫が見られる。教科書によっては該当する図が掲載されていないものや、やや異なる図が掲載されているものがある。

問3 火山に関する問題である。本試験では出題されなかった正誤判定の組合せ問題である。下線が付されており、難易度が上がらないよう配慮されている。bの沈み込み境界については、本州付近（大陸プレート）の断面図は全ての教科書に掲載されている基本的な図である。一方、伊豆－小笠原海溝のように、島弧において海洋プレートが海洋プレートの下に沈み込む断面図は、2社を除く教科書に掲載されていない。そのため、受験者によっては判断が難しく、不適切といえる設問である。bの記述については、特定の場所に限定するなどの配慮があれば、より思考を促す問題にできたと思われる。

問4 地球の層構造に関する問題である。最新の研究を題材としながらも、問われている内容は基礎的な内容であり、8択の問題ではあるが、評価できる良問である。特に、探査船「ちきゅう」によるモホ面掘削を題材とした点も評価できる。一方で、題材が設問に十分に活用されていない点は、やや残念である。

問5 古生代に関する問題である。オゾン層の形成過程と、その後の生物進化及び生物の特徴を確認する、基礎的な知識問題である。「オゾン層」「クックソニア」など、解答の手がかりとなる情報がリード文に示されており、難易度を適切に保つ工夫がなされている。植物の上陸が古生代中期であることを理解していれば、2択で解答できる点も評価できる。一方、酸素濃度の上昇によってオゾン層が形成された内容の記述がない教科書があり、受験者の公平性については疑問が残る。

問6 古生代に関する問題である。「古生代の後半」という言い回しは曖昧だが、誤答の選択肢はいずれも古生代に該当しない明確な内容であり、評価できる。単弓類を原始的な哺乳類（いわゆる哺乳類型爬虫類）と理解している受験者は多くないと推測されるが、消去法でも解答は可能である。本問のポイントである「出現」「繁栄」を強調のために太字にすると、受験者により親切である。なお、教科書によっては、爬虫類の出現は「古生代」と記載され、「後半」とまでは明記されていない。また、短弓類の出現に関する明確な記述が見られない教科書もある。

第2問 惑星の放射平衡温度、海流、深層循環に関する出題である。

問1 地球の温室効果に関する会話文形式の問題である。基礎的な内容であり、グラフの読解や惑星の放射平衡温度を扱い、思考力・判断力・表現力等を問う良問である。アルベドを考慮する必要がある、単純な知識問題にとどめない工夫が見られる。アルベドについて具体例を挙げて出題した点は新しく、評価できる。また、温室効果を大气による「太陽放射の吸収」と誤解している受験者もいたと考えられ、この点を区別させる意図も読み取れる。8択であることも含め、問題全体としてはやや難易度の高い問題である。

問2 南極環流に関する問題である。南極周極流は、教科書の図中に記載はあるが、全ての教科書の本文中ではまったく触れられていない。2023年の追試験でも同様の設問が出題されており、高等学校教員からの意見書にも設問の妥当性についての指摘があった。それにもかかわらず再び出題された意図に疑問が残る。さらに、灰色で示された緯度帯（南緯60度付近）を吹く風が

偏西風か極偏東風かを正確に理解していなければ解答できない。にもかかわらず、教科書掲載の図にはその緯度が明示されていない。また、風向きや海流の流れの記載についても注意が必要である。「○向きの風」という表現が「○の風」と同義であるとの誤解を招く可能性があり、「△から○へ向かって吹く風」など、誤解を生まない表現が望ましい。

問3 コンベアベルトに関する問題である。塩分変化の深層循環への影響を問う、基礎的な知識問題である。地球温暖化と関連付け、深層循環が停止するという仮定のもとで正しい理解を問う出題形式は評価でき、良問である。塩分が高くなる海域は、教科書によっては本文ではなく注釈で扱われている場合がある。しかし、「地学基礎」を学ぶ意義を実感させる内容となっており、その点でも出題する意義のある問題である。

第3問 元素の創生、原始太陽系円盤、太陽黒点に関する出題である。

問1 宇宙の晴れ上がりや微惑星に関する問題である。基礎的な内容であり、本試験に出題された同分野からの問題に比べるとやや平易である。宇宙創成期に関する分野は実験や観察の機会が限られているため、どうしても暗記に頼る学習が多くなる。それでも、微惑星の直径を問う設問は、やや細かい知識を要求していると言える。ただし、地球の半径が約6,400kmであることを踏まえれば、 $10^3 \sim 10^4 \text{km}$ という値は大きすぎると判断でき、思考による絞り込みも可能である。

問2 原始太陽系円盤に関する問題である。特に、原始惑星が成長している段階に絞った原始太陽系円盤の形状を問う知識問題である。このような図を掲載した教科書はなく、写真で示す教科書がある程度である。図にスケールが示されていないため、理解しにくい点がある。B及びCの領域に見られる白く抜けた部分についての説明がなく、そこに原始惑星が形成されていることを示しているのか否かが判然としない。また、彗星をイメージしたものなのか、A及びDの図も分かりにくい。原始太陽系円盤を扱った思考問題としての意図は理解できるが、この図はおろか写真すらも掲載していない教科書もあり、公平性に疑問が残る。さらに、宇宙空間の図示において「上から」「横から」という表現を用いるのは、意図は理解できるが適切とはいえない。「断面」「断面に直交する方向」などと表記する方が望ましい。なお、出題内容そのものとは直接関係しないが、ページ裏面の黒点グラフが透けて見え、図が重なってやや見にくい。

問3 黒点に関する問題である。黒点の温度は基礎的な内容である。一方、黒点の数の周期については数字を記憶している受験者もいると考えられるが、本問ではグラフを読み取らせる形式で解答させており、その点は評価できる。難易度は高くないものの、黒点周期のグラフが掲載されていない教科書がある。また、発展的内容に位置付けられる黒点の数の周期を扱う設問を出題することについては、その是非を議論する必要がある。今後、基礎的内容を超える内容についても、図や説明を付したうえで積極的に出題していく方針となるのか、注視したい。

第4問 ハザードマップ（土石流）、オゾンホール、ハビタブルゾーンに関する出題である。

地球環境に関する問題を一つの大問として扱うことが定着してきた。

問1 土石流に関する問題である。土石流危険区域の地形を地形図から読み取らせる点や、ハザードマップに触れた点は評価できる。アは基礎的な知識問題である。ただし、③・④のアの文はある教科書会社記載の文を引用しているが、図と併せて示されないと意味が分かりにくい。「斜面の土砂が表層の原形をとどめたまま流下する」などと表現した方が、より理解しやすかった。イは、地形図を読み取ることができれば解答でき、その点がヒントとして機能しているのも良い。地理など他教科との関連を意識して学習することの重要性を示すメッセージにもなり、評価できる。

問2 オゾンホールに関する問題である。南極の昭和基地から、対象が南半球であること、南半球の春が9～10月であることを判断し、「南極上空に太陽光が当たり始める季節」と結びつけ、

その結果、その前の7～8月が南半球の冬であり気温が低下することを考慮させる、思考力・判断力・表現力等を問う良問である。しかし、南極が北半球と季節が逆であることや、太陽光が当たり始める季節が春であることなどを、リード文中に示された情報だけで判断するのは難しい。もう少し情報がリード文や図で示せれば、受験者に優しい設問となる。なお、教科書によってはオゾンホールは季節変化に触れておらず、また、全ての教科書にオゾンホールの季節変動のグラフは掲載されていない。

問3 ハビタブルゾーンに関する問題である。太陽の状態が変化した場合、ハビタブルゾーンの位置がどう変動するかを体系的に思考させる問題であり、評価できる。初見のグラフからハビタブルゾーンを考えさせる設問構成も良い。さらに、数値計算ではなく「明るい／暗い」「近い／遠い」といった大小関係のみを問う形式も受験者に配慮されている。基礎的な知識とリード文・図を組み合わせれば解答できる問題である。ただ、太陽の明るさを求める式の内容は「地学」の範囲であり、出題方法には議論の余地がある。例えば、**ウ**は「太陽の明るさは表面温度が高いほど、また半径が大きいほど明るくなる」などの分かりやすい文でも良かった。ハビタブルゾーンは多くの教科書で太陽からの距離に重点を置いているが、太陽活動の変化も重要な要素であり、その影響によって位置が変化することを扱った点は新しい。さらに、系外惑星におけるハビタブルゾーンの話にも発展させることが可能となる良い題材の問題である。

3 総評・まとめ

今年度は、思考力・判断力・表現力等を問う問題数が増加したことにより、全体として難易度が上昇した。また、難易度が上がった要因の一つとして出題方法が挙げられ、発展的な内容や「地学」の知識を、リード文や図によって説明・明記したうえで解答させる問題が見られた。このような出題形式の是非については、改めて検討していただきたい。一方で、観察・実験に取り組んだ受験者の学習成果を評価する問題や、身近な資料や最新の地学に関する情報を活用した出題については、今後も継続していただきたい。最後に、「地学基礎」の受験者数の更なる増加につながるよう、問題作成方針である「高等学校学習指導要領に準拠する」に沿った出題を強くお願いする。

『地学』

1 前文

細かい知識の多寡を競うのではなく、教科書レベルの基礎知識を土台とし、図表や文章を読み解く思考力を問うバランスの良い出題である。本試験と比較して思考型問題がやや増加し、図の読み取りに工夫が凝らされている。一部に時間の余裕を奪うようなリード文の分量の多さは見られるものの、基本的な問題の割合が高く、「地学」という科目の本質的な理解度を測る試験として、概ね適正なレベルと内容で構成されているといえる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

大問5構成、小問数27題、ページ数33～36ページ前後で展開されている。この規模は本試験とほぼ同様であり、全体的なボリューム感に大きな乖離はない。出題内容は「地学」の全分野（地質、気象、天文など）を網羅しており、教科書の記述に準拠した基本的な知識を問う問題が中心である。図表やグラフを伴う設問が多く、図表を用いる問題は18題に及び、本試験と比較して2倍近くあり、明確な増加傾向にある。これは、単なる暗記量ではなく、提示された資料を正確に読み取る「思考力」や「判断力」を測る出題者の意図の現れといえる。

大問1は「旅行」を題材としたストーリー性のある構成をとっている。これは昨年度の気象分野を題材とした出題構造と類似しており、受験者が身近な事象から地学的な背景を考察できるよう工夫されている。リード文や会話文、図に関する説明文が長く設定されているため、設問の意図を正確に把握するための読解力が求められる。前半の地質分野については、比較的基本的で解答しやすい設問が多い。一方で、後半の気象・天文分野においては、図表の説明文の長さや読解の複雑さから、前半に比べて取り組みにくさを感じる構成となっている。特に後半部分では、文章や図・グラフをもとにした理解力や表現力が問われる設問が大問3以降に集中している。難易度そのものは極端に高くはないものの、情報の処理に時間を要するため、受験者にとっては時間内に全てを解答するのが困難であったと推察される。

第1問 旅行を題材にした小問集合であり、昨年や本試験を踏襲している。5分野全てから1題ずつ出題される工夫がなされている。

問1 本問は、緯度による重力の変化と振り子の周期の関係を生活体験に絡めて問う良問である。リード文は長い内容は標準的で、万有引力や重力加速度の違いを検証する定番の実験を題材としている。

問2 変成岩の産状と鉱物の安定関係が問われている。基本的な知識問題ではあるが、ヒスイ輝石など教科書の枠を超える細かな知識を要求している。実際の岩石の画像や鉱物の安定関係図（相図）を読ませる問題の方が、受験者は解答しやすかったと思われる。工夫が必要な問題である。花こう岩の中には片麻状の組織を呈したり、珪線石やザクロ石を含んだり、厳密に変成岩であることを限定しないと解答がない問題になる。

問3 断熱減率に基づき雲の発生高度を求める問題である。地形性上昇気流が題材の典型的な計算問題だが、気温データを本文ではなくグラフに集約した点に工夫が見られる。数式による計算だけでなく、グラフ上に2本の直線を引く作図によっても正答を導けるよう誘導されており、思考力を問う良問である。

問4 離れた地域の地層を化石の産出状況から対比させる、「地学基礎」範囲に準じた標準的な思考問題である。示準化石の定義の理解と、表や図を正確に読み取れば容易に正答を導き出せ、

受験者は取り組みやすい。対比「できない」層を選択させるひねりや、最上位・最下位層を除外して絞り込む条件設定は、判断力を問う良問として評価できる。

問5 暗黒星雲の構造と恒星の誕生プロセスを問う、会話文形式の知識問題である。掲載された写真が鮮明で、表面温度に着目させるなど正答へ導く工夫が見られる。三つの空欄を組み合わせた8択形式となっているが、内容は基本的であり正答率は維持されるだろう。

第2問 地球の形状，地球の内部，地球の活動に関する出題である。

問1 地球内部の構造や密度，地震波速度に関する出題。内容は教科書にある基礎的な知識を問うものが中心だが，単なる状態の暗記ではなく，P波速度と関連付けたり，前節の情報を活用させたりといった工夫が見られる。地学の重要事項を網羅した良問であり，思考力を試す側面も評価できる。

問2 重力，地磁気，地殻熱流量など，地球物理学的現象に関する知識と考察力が問われている。ブーゲー異常や地磁気逆転，モホ面の性質といった詳細な知識に加え，具体的事例に基づいた深い理解が求められるため，受験者には難易度が高い。広範な出題範囲を網羅し，各探査の重要性を再認識させる良質な構成である。

問3 VLBIの原理と，巨大地震に伴う地殻変動の実際のデータからの出題である。東北地方太平洋沖地震の際に大陸プレートがどう動いたかという具体的な知識が不可欠であり，単なる用語の暗記ではなく現象のイメージ力が合否を分ける。実際の観測データの引用は評価できるが，思考力を問うならば，GPS観測点の移動の実際から距離の変化の模式図を選ばせるような問題や，グラフからプレート移動変化を読み取る思考問題にした方が良かった。

問4 活断層の動きから岩盤に働く応力や押し引き分布を判定する，教科書の内容に準じた思考問題である。発震機構の基本知識を活用させる共通テストに相応しい良問であり，図も分かりやすくして良い。解答には一定の時間を要するが，地震による変位から力の方向を導き出す判断力を測るのに適した問題である。

第3問 岩石とプレートテクトニクス，火成活動に関する出題である。

問1 地殻からアセノスフェアまでの物質構成や状態を問う基礎的な知識問題である。図の活用により視覚的な理解を促す工夫がなされ，「地学基礎」の範囲を逸脱しない基本的な内容となっている。選択肢を8択にすることで難易度を調整しており，アセノスフェアとマグマ発生の混同に注意を要するものの良問である。

問2 火山分布とマグマの発生条件，岩石の特徴を問う，「地学基礎」の内容に準じた基礎的な知識問題である。海嶺を除いた火山分布の提示や，会話文形式の採用，登場人物の名前に雲母の学名（マイカ）を冠するなどの工夫が見られる。枕状溶岩と玄武岩の関連や減圧溶融の知識が鍵となるが，8択形式による調整を含め，全体として標準的な良問である。

問3 地質図から地層の傾斜や断層の種類を特定する，共通テストに相応しい標準的な思考問題である。最下位層の分布や断層の切り合いに着目する読図力が求められ，断層を含んだり，掘削を入れたりした工夫がみられ，十分な演習がないと難しく感じる内容である。作図用の空欄を設けるなどの配慮も見られ，難易度・構成ともに良問である。

問4 地質図から地下の地層の繋がりを読み解く，オーソドックスな思考問題である。走向線を引くなどの基礎的な読図力が求められるが，補助線の提示により空間把握が苦手な受験者へ配慮した構成となっている。ポーリングを模した設定を含め，「地学」の試験として相応しい良問であり，習熟度による差が出やすい内容である。

問5 結晶分化作用に伴う斜長石の組成変化やマグマ混合を問う内容である。教科書の基本範囲を超えた「累帯構造」を扱っており，一つの結晶内で成分が変化する現象の理解を求める点は受

験者には難易度が高い。リード文の工夫や選択肢の調整は見られるが、図の提示や丁寧な補足がなければ正解への到達は厳しい難問である。

問6 コンドライト隕石の特徴とコンドリュールの成因を問う、教科書の内容に準じた知識問題である。無重力状態における液体の表面張力という物理的側面に触れた点や、教科書以上に鮮明な顕微鏡写真を掲載して視覚的な理解を促した工夫が、高く評価できる。基礎知識を基に宇宙の初期過程を想起させる構成となっている。

問7 上流から下流にかけての粒径変化をグラフから読み取る基礎的な思考問題である。グラフの読解の難易度は平易なものだが、ヒュルストローム図の理解を背景とした、地学的な洞察力を測る良問。ヒストグラムの読解や並べ替えを通じ、流速と粒子の挙動をイメージさせる構成である。

問8 示準化石の生存年代を問う基本的な知識問題である。内容は「地学基礎」の内容の平易なものであり、正解を導くのは容易である。名称の知識だけでなく、スケッチや写真を用いた観察力の重視や、より詳細な古生物名を出題に組み込むなどしても良かった。

第4問 大気海洋分野からの出題である。

問1 エルニーニョ現象発生時の海象・気象変化を、単なる水温分布ではなく「平年値との差(偏差)」という視点から多角的に分析させる高度な思考問題であり、南方振動の本質に迫る良問。海上風の偏差を問う出題は珍しく、気圧配置の変化と風向の相関を正確に理解していなければ正解に辿り着くのは極めて難しい。受験者は偏差の定義の解釈や等値線の判読に多大な時間を要したと思われる。

問2 回転水槽を用いてハドレー循環や偏西風の波動を再現する定番の実験を題材とした思考問題である。教科書に掲載されているモデルだが、思考しようとする物理的な知識が必要となり、知識の暗記問題となっている。レポートの読み込みに時間を要する構成だが、図から瞬時に気象モデルを想起できるかが鍵となる。結果の部分をヒントに、現象を思考できるよう工夫されている。出題意図の理解のしやすさから、図1の下に図2を並べて掲載しても良かった。

問3 気圧の谷と低気圧の位置関係、および中緯度における熱輸送の仕組みを問う教科書に準じた基本問題である。偏西風波動や温帯低気圧の発生原理といった標準的な知識の正確さが求められる良問だが、受験者にとっては難しく感じられる側面もある。文章選択だけでなく、教科書の図解を想起させるような図から選ばせるような工夫があっても良かった。

問4 教科書に未掲載のグラフを用い、与えられた条件から情報を抽出する問題解決能力を問う良問である。風浪の成因や波高の性質に関するリード文を正確に理解すれば、複雑な計算を介さずとも容易に解答できる、難易度の高くない読図問題である。初見の資料を扱う共通テストらしい構成といえる。

問5 緯度や深さによる海水温と塩分の変化を、グラフから判別する標準的な知識・思考問題である。下降気流が卓越する亜熱帯高压帯での蒸発による塩分上昇や、熱帯とは異なる亜寒帯特有の環境条件に着目させており良い。水温の分布は自明であり、気候帯ごとの蒸発・降水バランスの知識を活用すれば正解を導き出せる、地学の基本を網羅した良問である。

第5問 宇宙膨張と系外惑星系の観察からの出題である。

問1 ハッブル・ルメートルの法則に基づき、宇宙膨張に伴う銀河どうしの相対的な後退速度を問う基本問題である。一直線上に等間隔で銀河を配置し、特定の銀河を基準に設定するなど、条件を単純化して思考を促す工夫がなされている。相対速度の概念を正しく理解していれば平易に解答できる内容だが、この後は宇宙膨張に関する出題が連続しており、分野のバランスにやや偏りがある。

- 問2 ハッブル・ルメートルの法則を利用して宇宙の地平線までの距離を導き出す、本試験唯一の計算問題である。メガパーセクという単位の理解や、後退速度が光速に達する地点を「地平線」とする定義の把握がポイントとなる。リード文にヒントがあり難易度は平易だが、選択肢の数値設定が容易すぎることや、距離の単位を光年に換算して出題するなどの工夫があっても良かった。
- 問3 宇宙膨張に伴う背景放射の波長変化や温度低下、ダークエネルギーの知識を問う思考問題である。教科書未掲載のグラフを、膨張により波長が伸びエネルギー強度が下がるという物理的原理を用いて読み解く必要があり、理系的センスや深い理解が試される。Ⅰのダークエネルギーは、「近年の観測により宇宙膨張速度が加速している」などといった文言があるとわかりやすい。リード文の情報を活用して考察させる構成で、学習の習熟度を測る良問である。
- 問4 食連星の変光原理を系外惑星系に応用した思考問題である。試験の終盤に配置され、リード文やキャプションが長く読解に時間を要する構成だが、図の提示により内容は中学生の知識でも対応可能なほど平易に整理されている。系外惑星の観測という現代的なテーマを、伝統的な食連星のモデルで解かせる点は良問として評価できるが、文章量の多さが受験者の負担になったと思われる。
- 問5 内惑星の満ち欠けの原理を系外惑星に応用した思考問題である。内容は中学生の知識で対応できるほど平易だが、試験最終盤に配置された膨大な文章量と、「系外惑星の夜側が見える」といった表現の不明瞭さが受験者の混乱を招いている。特に、実際の観測における波長（可視光か赤外線か）の定義が曖昧である点や、高校地学としての専門性に欠ける点など、設問の表現や構成に課題を残す内容と評されている。

3 総評・まとめ

教科書に準じた基礎的な知識を土台とし、図表や文章を読み解く思考力・判断力を重視した、バランスの取れた問題である。今後も、問題作成方針である「高等学校学習指導要領に準拠する」に沿った出題をお願いするとともに、共通テストの意義である「高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する」ことを踏まえた問題作成に取り組んでいただきたい。